

第5章 和歌山県瀬戸遺跡の第4・5次発掘調査

泉 拓良 花谷 浩

1 調査の経過

瀬戸遺跡は、紀伊水道に突き出た番所の崎にある陸繋砂州上に立地し、和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸所在の、京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内に含まれている。昭和40年の遺跡発見〔伊勢田66〕以後、数次にわたる発掘・立合調査などをおこない(図40)、縄文時代～奈良時代を主とする複合遺跡であることが判明した〔中村友77, 丹羽78, 泉ほか80, 京大埋文研81b 図版2〕。本報告は、研究棟新営等に伴い、昭和56・57年度の2次にわたって実施した発掘調査(図40-5・6)の概要である。現在、従来からの調査と合わせて報告書を作成中であり、今回は資料の紹介だけにとどめた。

一連の発掘調査の終了にあたって、昭和57年度に検出した奈良時代の石敷製塩炉を、実験所の御好意により、樹脂で固定して水族館の東に移築し、埋甕や製塩土器の複製を据えて修景をおこなった。白浜町の歴史的環境を理解する上での一助になれば幸いである。

なお、人骨の鑑定は池田次郎氏に御願いし、弥生土器については佐原真氏、移築については沢田正昭氏、製塩土器については近藤義郎氏、巽三郎氏をはじめ多くの方々に御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

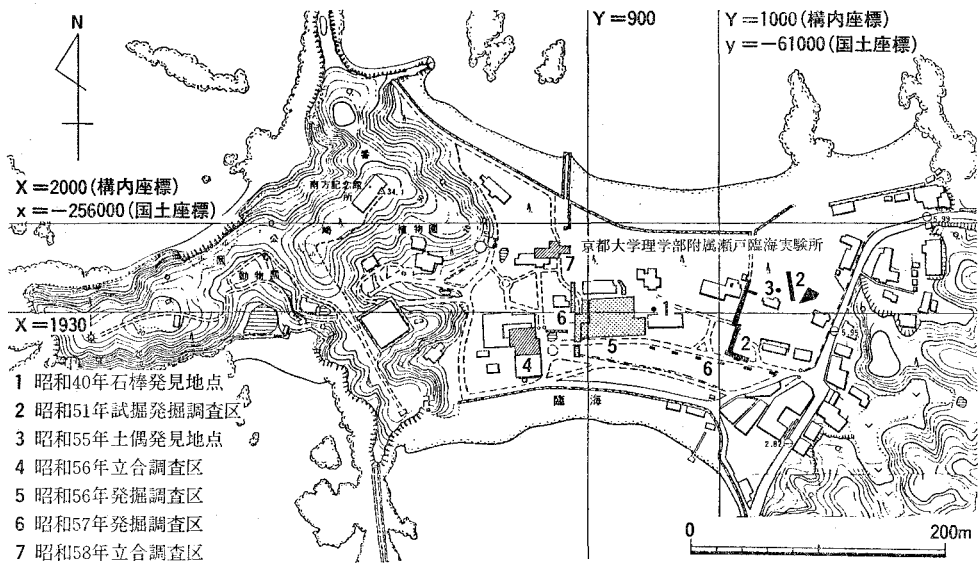


図40 調査区の位置 縮尺1/6000

昭和56年度の発掘調査にあたって、遺跡の広がりや立地を知り、調査区の位置を正確に記録するために、実験所構内全域の地形測量、基準点測量をおこなった。この測量をもとに、国土座標第6座標系 $x = -256000$ が $X = 2000$ 、 $Y = -61000$ が $Y = 1000$ となる実験所構内用の局地座標系を設定し、遺構や遺物を記録することにした(図40)。

2 層 位

調査区の地表は標高6～6.5mで、北東から南西へゆるく傾斜している。調査区の層序は東西方向で大きな変化はなく、南端部では、地表から1.8m下の海成層と思われる貝粉混灰白色砂(第15層)までのあいだに、10層の堆積が認められる(図41上)。各層のうち、暗褐色砂2(第4層)からは奈良時代の製塩土器が、貝粉混黒褐色砂(第9層)からも古墳時代前期の製塩土器が層をなして出土した。両層のあいだにある黒褐色砂1(第6層)は古墳時代後期の製塩土器をわずかに包含しているだけである。その上面は凹凸が多く、上部に小石や軽石がみられ、海水による侵蝕を受けた可能性が強いと考えている。

一方、南北方向の層序は、 $X = 1922$ 付近を境として、北と南とで違いがある(図41下)。 $X = 1920$ 以南は、調査区南壁の層序とはほぼ対応するが、各層位は北へ向って徐々に高くなり、 $X = 1923$ 以北では、古墳時代以降の包含層が地表の黄白色砂(第5層)と区別がつかなくなる。また調査区北半に分布する縄文晩期・弥生前期の包含層である暗褐色砂3(第12層)は、 $X = 1922$ 以南で他の層との区別がつかなくなり、この時期の遺物もそれにとまって出土しなくなる。おそらく、 $X = 1922$ 付近に不整合面が存在するのであろう。

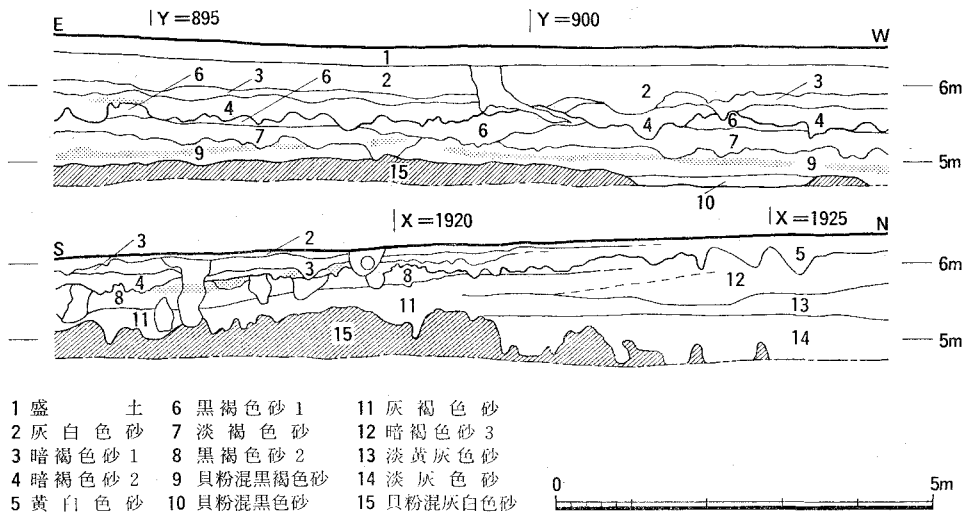


図41 調査区南壁(上)と中央畔東壁(下)の層位 縮尺 1/100

3 縄文晩期・弥生前期の遺構と遺物

検出したこの時期の遺構には、配石墓、土器溜、土坑、小土坑群(図版20-2)などがある。ここでは主として、配石墓と土器溜の一部について、遺物を含めて説明する。

配石墓 S X 1 (図版19~21, 図42・43) 調査区のほぼ中央、暗褐色砂 3 上面で検出した。北西の一部を攪乱で破壊されているが、一辺 20~30cm の石やサンゴを 2, 3 重に廻らし、東西 1.8m, 南北 1.4m の隅丸方形に配している。配石の中央には、石の配されていない、東西 0.9m, 南北 0.3m, 深さ 0.3m の土坑があり、そこで北側から落ち込んだ状態の深鉢 IV 1 を検出した。配石の北でも、南側へ横倒しになった状態の壺 IV 2 を検出しており、かつこの破片が深鉢 IV 1 と重なっていたことから、深鉢と壺はこの配石墓に供献されたものと考えられる。深鉢 IV 1 は平底の 2 条凸帯文土器。凸帯上の刻みはかすかで、口縁部は内面の撫でによって強く外反する。壺 IV 2 は、口頸部と頸胴部に 4 条 1 組の篋描直線文があり、器形からみて、弥生前期畿内第 1 様式中段階新相の壺である。両者の胎土には、かどのとれた小礫が多く、在地の土器であろう。配石下には、東西 2.1m, 南北 1.5m, 深さ 0.7m の土坑があり、下部から成人男子の大腿骨 1 片が出土している。

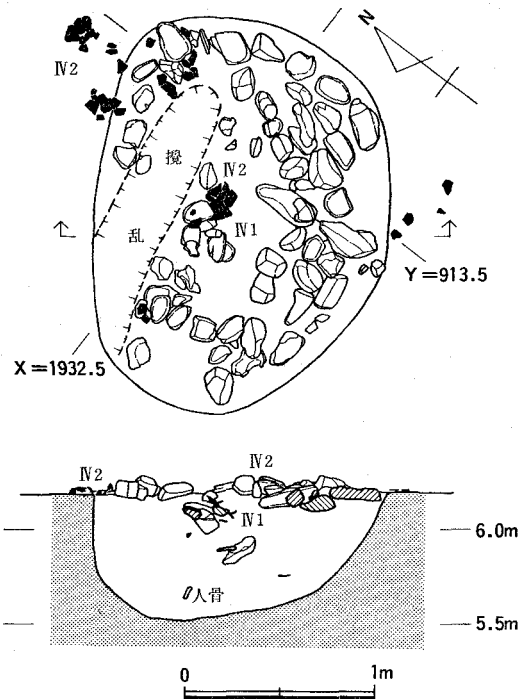


図42 配石墓 S X 1 縮尺 1/40

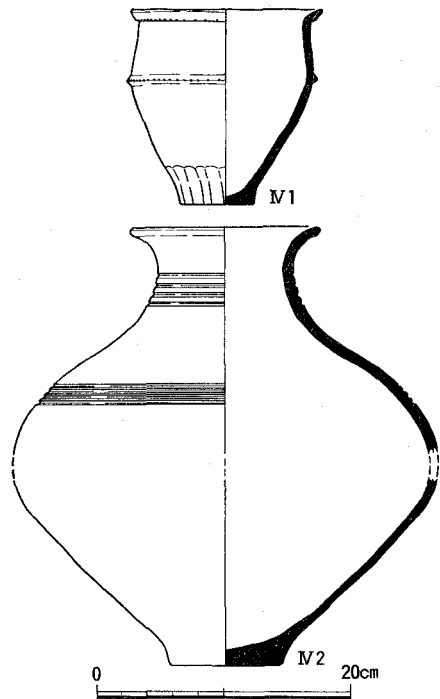


図43 S X 1 出土遺物 縮尺 1/6

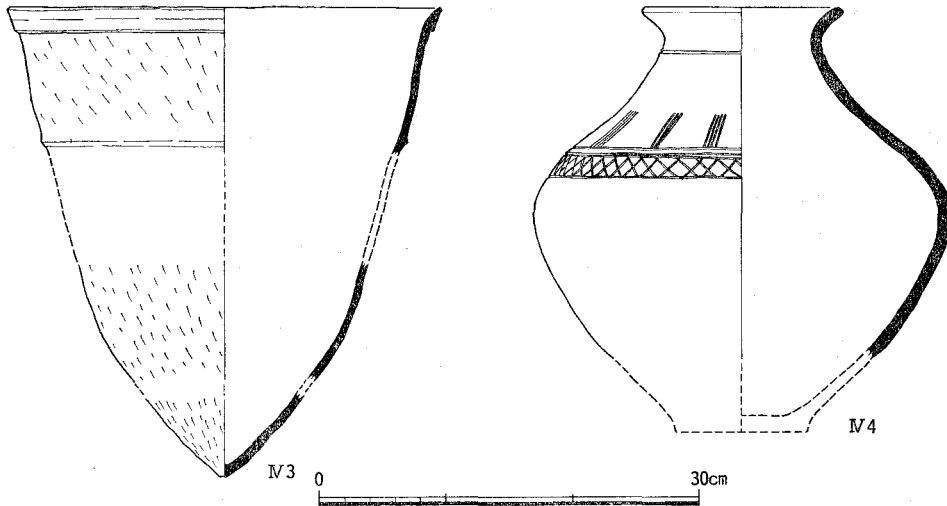


図44 S P30出土遺物(Ⅳ3凸帯文土器深鉢, Ⅳ4弥生土器壺) 縮尺 1/6

土器溜S P30(図版20-3・21, 図44) 調査区の西寄りで見出した掘形不明の土器溜。直径2mの不整形の範囲に土器が集中していた。まとめて出土したのは数個体分の凸帯文土器と弥生土器1個体であるが、弥生土器は離れた地点にまで破片が分散していた。凸帯文土器はⅣ3で代表される尖底の2条凸帯文深鉢である。口縁部凸帯は、断面∟形ではあるが、幅広で背が低く、凸帯上を2段に撫でるといふ特徴をもち、胴部の凸帯も痕跡的である。Ⅳ3の胎土にはⅣ1・Ⅳ2と同様、かどのとれた小礫が多い。壺Ⅳ4は、口頸部に1条の篋描直線文、頸部下半に3・4条1組の篋描縦線文、頸胴部に3条の篋描直線文と斜格子文を描く。頸胴部にある3条の直線文のうち、最上部の沈線文は他の2条より太く描かれており、頸・胴部間を区分する段としての意識を残している。畿内第Ⅰ様式中段階の古相に属する。なお、胎土には、かどばった石英粒や黄褐色のくさり礫が含まれており、他地域から搬入された可能性が強い。

その他の出土遺物(図版21, 図45) 先の遺構から出土した土器のほか、5000点を越えるこの時期の土器片と、約500点の石器・礫が出土した。縄文土器は、中期五領ヶ台式系1片、後期宮滝式数片、晩期滋賀里Ⅲ式10数片以外、すべて凸帯文土器である。ただし、凸帯文土器の一部はS X 1やS P30での共伴遺物からみて、弥生前期中葉まで下る。

凸帯文土器は、断面▷形やカマボコ形の凸帯を口縁下にだけもち、凸帯上の刻みが顕著な滋賀里Ⅳ式(Ⅳ5～Ⅳ7)と、幅広で背の低い断面∟形の凸帯をもつ土器群(Ⅳ8～Ⅳ11)とに大別できる。Ⅳ8～Ⅳ11の土器群は、口縁部凸帯の整形技法と、頸・胴部を区別する

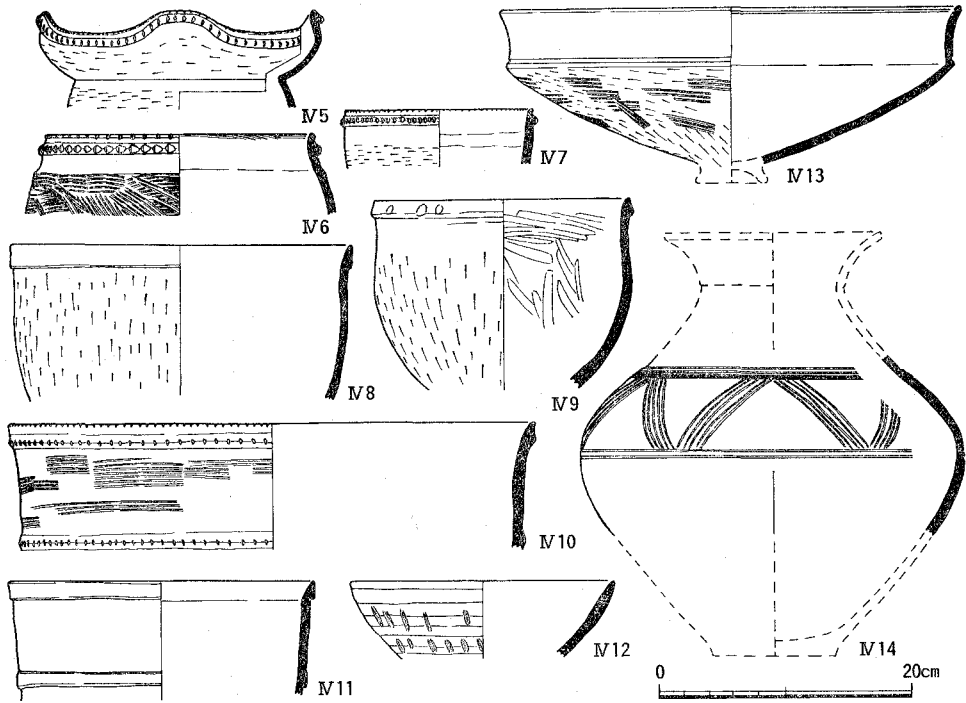


図45 縄文・弥生土器(Ⅳ5～Ⅳ11凸帯文土器深鉢, Ⅳ12・Ⅳ13同浅鉢, Ⅳ14弥生土器) 縮尺 1/6

屈曲部の消失という点では、晩期終末の長原式の特徴と一致する。しかし、口縁部や胴部の凸帯が幅広であったり、背が低いこと、口縁部が外反気味であること、尖底が多いことなど異なる点も多い。これらよりは古い様相を示す2条凸帯文土器が昭和51年度発掘調査で出土している〔中村友77図版51, 丹羽78 p. 28〕。この資料をも加えて、瀬戸遺跡での凸帯文土器の変遷を明らかにし、弥生土器と共伴する凸帯文土器が、近畿地方における凸帯文土器のどの段階に位置付けられるのかを明らかにする必要がある。Ⅳ13は内折する口縁部をもつ浅鉢。Ⅳ12は外面に粘土紐の継ぎ目を残す碗形の浅鉢で、Ⅳ13より後出である。

前期弥生土器は壺に限られ、数10片が出土した。頸胴部間に段を有するもの(Ⅳ14)や、削りだし凸帯をもつものが主で、5本以上の篋描直線文や貼付け凸帯文をもつ壺は出土していない。したがって、畿内第Ⅰ様式中段階に収まる資料がほとんどと考えられる。

石器は、石鏃11点、石錐5点、削器2点、ピエスエスキューエ12点、石棒6点、結晶片岩の細片100片、敲石・凹石・磨石類50点、打欠石錘8点、石包丁1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、硬玉製小玉1点、剝片105片であった。剝片のうちには、香川県坂出市金山東産と思われる板状の大型剝片1片がふくまれている。

4 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代前期の遺構は包含層中から掘り込んだ3基の土器溜(SK1, SK4, SK7)と1基の粘土溜が検出された。出土遺物には、土師器壺・甕・高杯・鉢, 製塩土器, 土錘, 牙製品, 鉄製品があり, 口縁部計測・底部計測で総数約1150個体を数えた。

土器溜SK1・SK4・SK7出土の遺物(図版22, 図47) 土器溜SK1(図版20-5, 図46)は東西1.5m, 南北1.2mの不整形を呈し, SK4は径2.3mの円形, SK7(図版20-4)は東西4.5m, 南北4mの不整形の土坑である。これら3基の土器溜出土遺物は, ほぼ同時期であり, SK1とSK7出土資料については一括遺物とみてよいので, 当該期の土器を, この2基の土器溜資料を中心に概観する。

壺は, 口縁部を竹管円形浮文と山形波状文で飾る二重口縁壺(V15・V32)がある。甕はSK1から底部IV16・V17が出土したほか, SK4からほぼ全形のうかがえるものが出土し

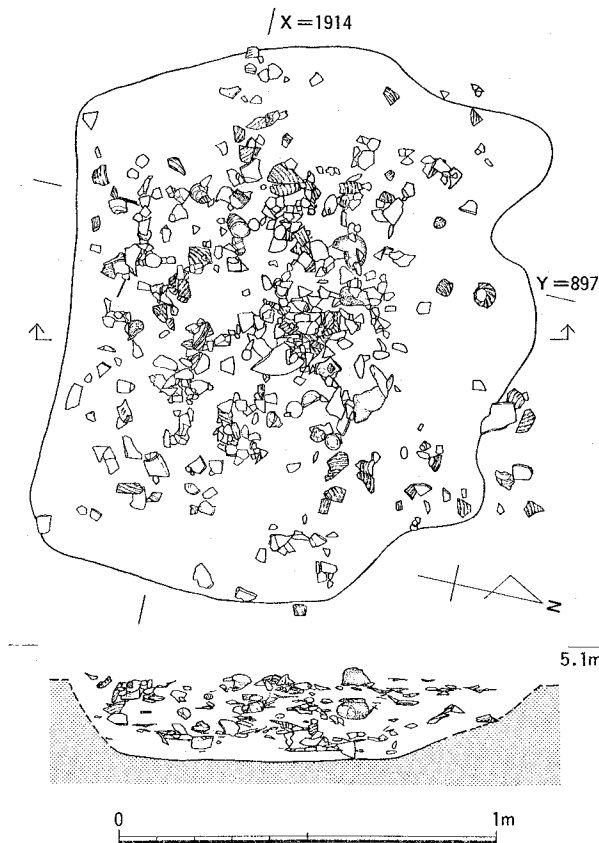


図46 土器溜SK1 縮尺 1/20

た(V30・V31)。倒卵形の胴部と突出した平底をそなえ, 外反する口縁部は, 端部に刻み目を入れるのが特徴である。口縁は下半部を叩き出し手法によってつくり, 粘土を加えて拡張するため, 外面に叩き目と粘土の接合痕, 指おさえ痕が残る。高杯(V18~V20)は, 屈折してひろがる大きな杯部をもち, 脚部内面を除くほぼ全面に丁寧な磨き調整をおこなう。鉢は碗状の形態のもの(V21)と, 屈折して外傾する口縁のもの(V33~V35)がある。V21とV34は粗製の鉢である。これらの土器群は, 和歌山県串本町笠嶋遺跡〔串本町教委69 pp. 82-111〕,

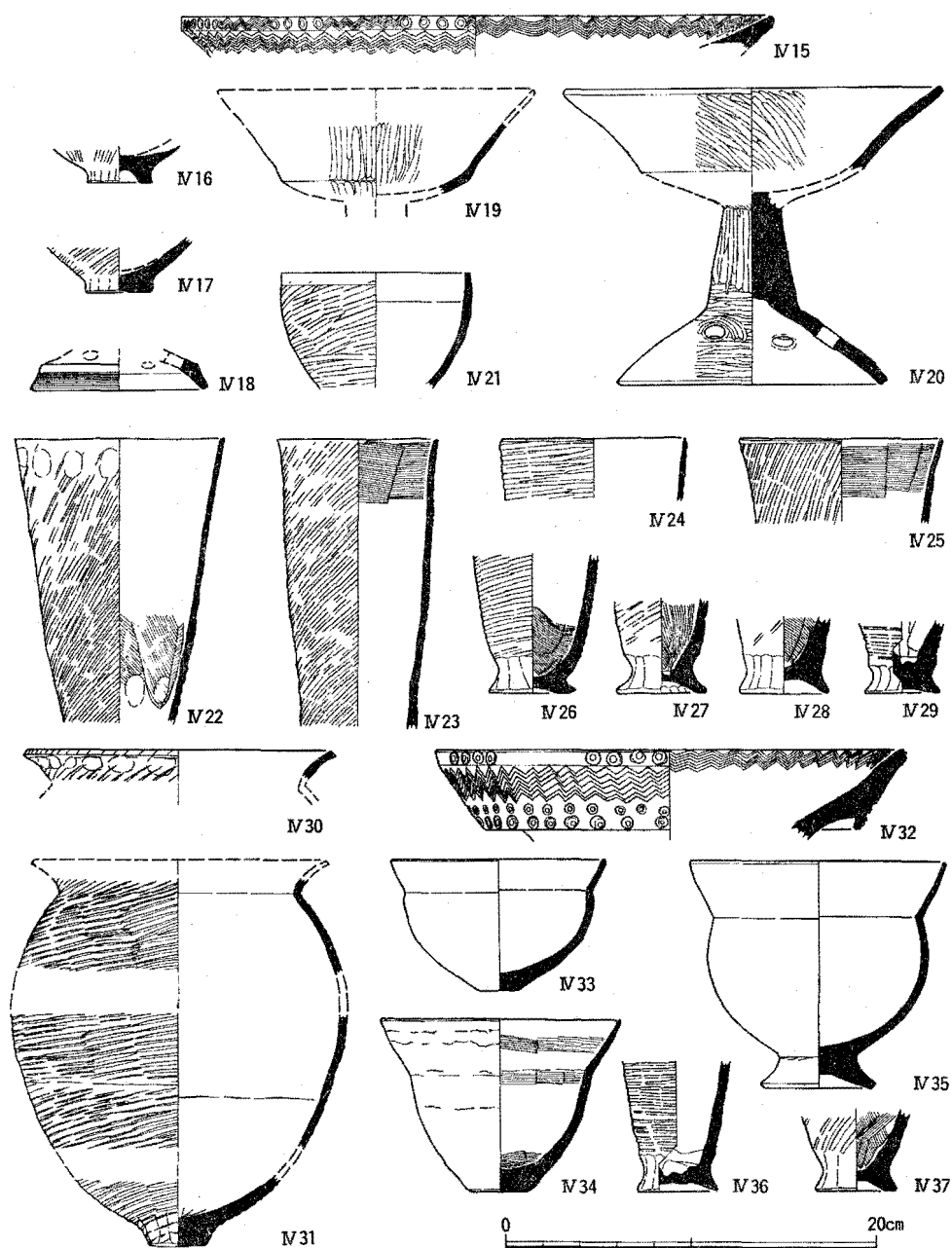


図47 SK 1 出土遺物 (N15土師器壺, N16・N17土師器甕, N18~N20土師器高杯, N21土師器鉢, N22~N29製塩土器)
 SK 4 出土遺物 (N30・N31土師器甕, N37製塩土器)
 SK 7 出土遺物 (N32土師器壺, N33~N35土師器鉢, N36製塩土器)

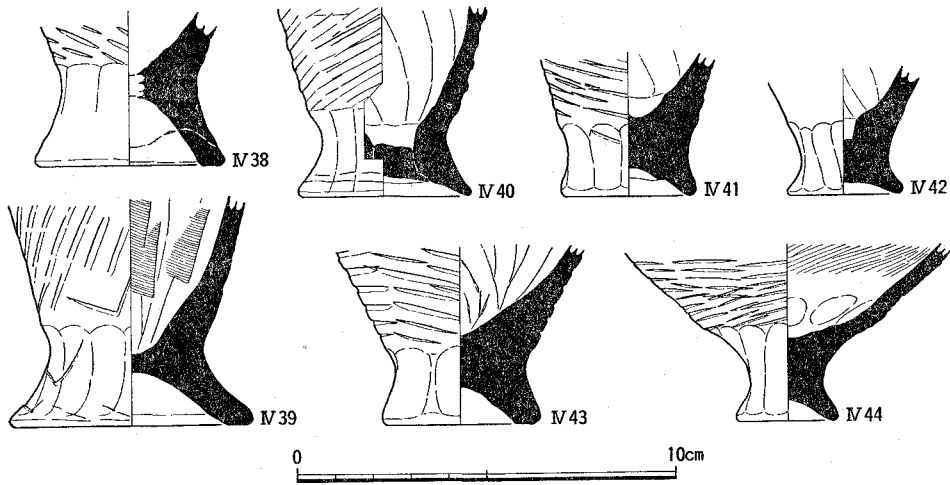


図48 目良式土器B類の分類
(Ⅳ38・Ⅳ39 I式, Ⅳ40 II A式, Ⅳ41・Ⅳ42 II B式, Ⅳ43 III A式, Ⅳ44 III B式)縮尺1/2

同県岩出町吉田遺跡53号住居址〔和歌山県教委71 pp. 8-9〕出土の土器に類似する。布留式の影響が認められないことや、高杯・鉢の形態から、SK1・SK7出土の土器は、庄内式の第1期〔大阪文化財センター80 pp. 203-240〕に併行する時期に比定できる。

製塩土器(目良式土器B類)の分類と編年 古墳時代前期の瀬戸遺跡の性格を物語る遺物は、目良式土器B類〔近藤64 pp. 37-44〕にあたる製塩土器であろう。出土総数は約1000個体(脚台部計測による算定)をかぞえ、この時期の出土土器のうち9割を占める。

ここでは、瀬戸遺跡出土の目良式土器B類の分類と編年をおこなうが、今回は大要を述べるにとどめ、詳細は報告書に譲りたい。瀬戸遺跡出土の目良式土器B類は脚台部と胴部の形状から、次の3型式に大別できる(図版22, 図48)。I式(Ⅳ38・Ⅳ39)は脚台径5.5~7cmで筒形の胴部, II式(Ⅳ40~Ⅳ42)は脚台径3~5cmで筒形の胴部, III式(Ⅳ43・Ⅳ44)は鉢形にひろく胴部を、各々特徴とする。I式は、胴部下端から脚台基部をつまみ出し、さらに粘土を加えて脚台部を高くする手法が特徴的である(Ⅳ38)。この手法は、II式とIII式とは認められない。II式とIII式は、脚台部と胴部の形態により、II A式(Ⅳ40)とII B式(Ⅳ41・Ⅳ42)、III A式(Ⅳ43)とIII B式(Ⅳ44)とに細分できる。各型式間関係を理解する上では、土器溜資料が重要な位置を占める。SK1, SK4, SK7から出土した目良式土器B類(図版22, 図47Ⅳ22~Ⅳ29・Ⅳ36・Ⅳ37)は、脚台径4~5cm, 口径9~11cm, 推定器高22cm前後で、先の分類のII A式にあたる。土器溜でII A式が他型式を混じえず出土したことと、I式とII B式とが共伴せず、II B式が上層から出土したことから考えて、

I式、II A式、II B式のうちI式が最も古く、II B式が新しい。III式はIII A式の位置づけに問題が残るが、II B式に後続するとみてよい。以上の各型式を従来の紀淡海峡地帯の製塩土器分類に対比すると、I式は森・白石A類とB類の一部、脚台I式の一部と脚台II B式に、II式は森・白石B類、脚台II A式に、III式のうちIII B式が森・白石D類、脚台IV式にほぼ対応する〔森・白石68 pp. 28-58, 広瀬78 pp. 1-24〕。また、II A式の時期は、土器溜SK1・SK7の共伴例から、庄内式の第I期である。この時期比定は、和歌山県御坊市尾ノ崎遺跡竪穴2で、庄内式第II期の甕とII B式とが共伴したこと〔御坊市遺跡調査会80 p. 13, 第3図〕と矛盾しない。

5 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、製塩炉SX2と須恵器埋甕SX3、および土器溜SK36があった。

SX2(図版20-6, 図49)は、約30個の石を東西1.4m, 南北1.5mの馬蹄形に敷き並べた石敷製塩炉である。平らな面を上に向けて密に並べられた石は、火熱のため赤色や赤紫色に変色し、軟質の砂岩のなかには碎けてしまったものもある。南辺中央の、東西25cm, 南北40cmの部分には敷石が認められない。この部分の砂は火熱を受け赤変しているので、元来、石は敷かれていなかったとみてよい。SX2の北約1.2mの所に、胴径27cmの須恵器甕が置かれていた(SX3, 図50)。その位置から考えて、製塩炉SX2にとりもなるものであろう。土器溜SK36は、調査区の南に接する地点から検出された。東西1.5m, 南北は0.8mを確認した。土坑内には、火を受けて細片化した製塩土器が隙間なく詰まり、出土土器の総量は10.8kgをはかった。

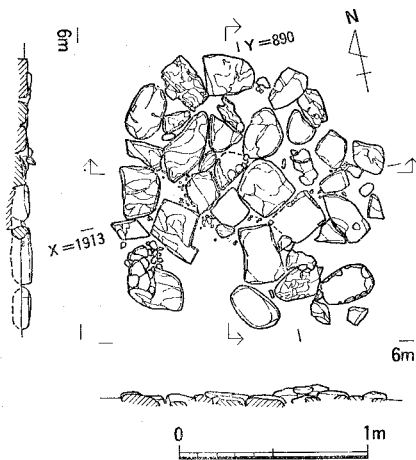


図49 石敷製塩炉SX2 縮尺 1/40

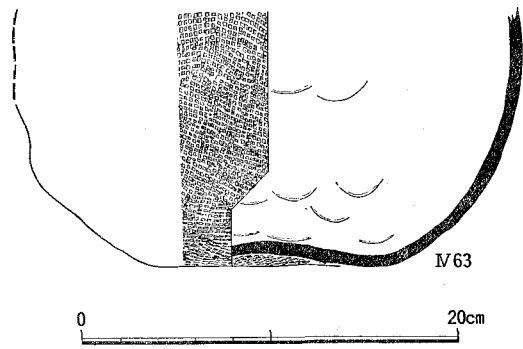


図50 埋甕SX3 出土遺物

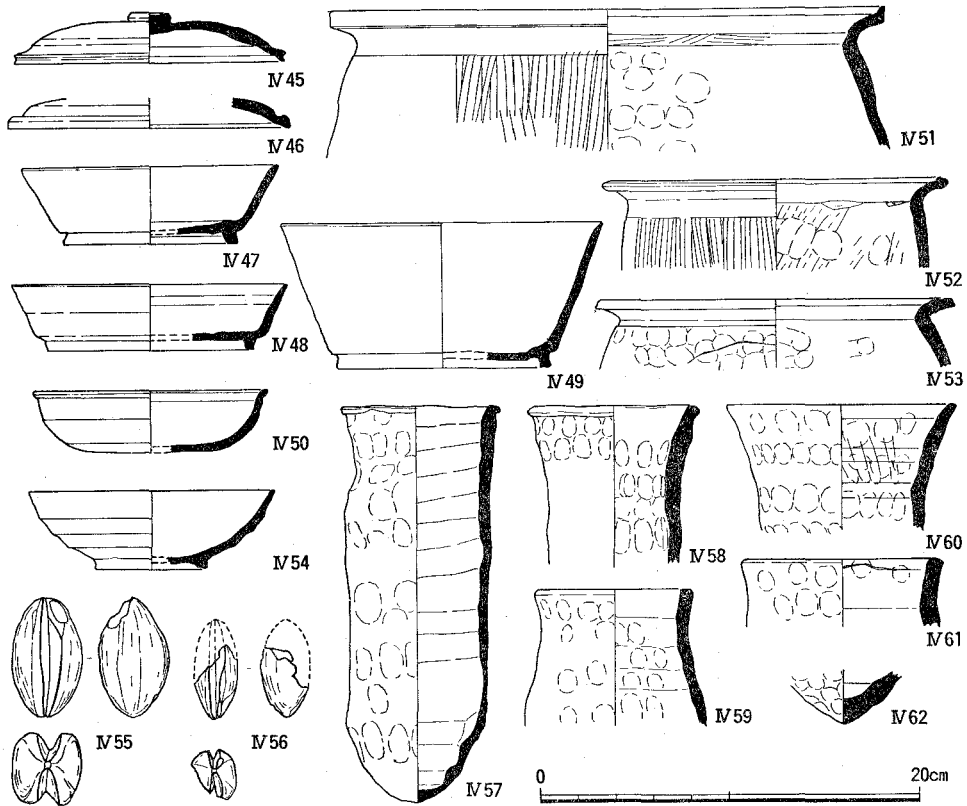


図51 奈良・平安時代の出土遺物
 (I45~I49須恵器, I50~I53土師器, I54黒色土器, I55・I56土錘, I57~I62製塩土器)

遺物はSK36の製塩土器, SX3出土の須恵器以外は, 包含層からの出土である。須恵器杯蓋・杯身・壺・甕, 土師器杯・皿・甕, 黒色土器椀, 製塩土器, 土錘, 鉄製品がある(図版22, 図51)。製塩土器は, 円筒形の胴部と尖り底ないし尖り気味の丸底をもった器形で, 口縁は直立するか, あるいは, わずかに外反する。完形に復原しえた1個体(I57)で法量をみると, 口径8.5cm, 器高21cm, 容量約650ccである。森・白石G類, 丸底Ⅲ式に対応する〔森・白石68 pp. 28-58, 広瀬78 pp. 1-24〕。これらの遺物は, 平安時代にくだる黒色土器以外は, 奈良時代のものであり, 紀ノ川流域での奈良時代土器編年の第3段階, 8世紀後半に位置づけることができる〔岩出町教委82 pp. 31-37〕。

以上が, 調査の概略であるが, 先に述べたように, 現在報告書を作成中であり, 今回は検出した主要遺構の概略と, 出土したおもな遺物の説明にとどめた。